
作者のヨナへの愛から生まれた番外編

Lolo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者のヨナへの愛から生まれた番外編

【Nコード】

N9722X

【作者名】

Lolo

【あらすじ】

宰相ヨナの愚痴であります（笑）。それと、一部が【王城恋愛騒動】（予定では5話）と連動していますから、その内容に引っかけた人はこれで納得してください。

作者のヨナへの愛から生まれた番外編1（前書き）

一人称の文ですが、ワタクシ、一人称使用に慣れていません。とっつきやすくなるどころか、判りにくくなっている可能性も……。

作者のヨナへの愛から生まれた番外編 1

私はいつでもこんな目に遭ってばかりだ。……文句を言っても仕方がないが。

内乱が終結してから丸一日、私は眠っていたらしい。怪我也多かつたが、ヨーゼフ様の頼みによりシユウが医療魔法を使ってくれたという。彼に会ってお礼を言いたいのだが……その時間さえない。

目を覚ました私を待ち構えていたのは、内乱の後処理だ。今回の内乱で、4つの大將軍の部隊が壊滅して死亡したウラデイス、禁術の影響で廃人状態になったラルトウールを除いた2人を法廷で裁かなければならないが、ダグラス一派に手を貸していた文官が予想外に多く裁判の人手さえ足りないのが事実。裁判の進行も私が取り仕切る羽目になりそうだ。また、4大將軍の部下達だが故意に内乱に加わったか本心に逆らって上官命令に従ったかを調べるため尋問を行う事になっている。これは、セバスチャン殿とその部下達が手伝ってくれるため、半月もすれば終わるだろう。

それが終わったら今度は、処罰対象にならなかつた4大將軍の部下達の新たな配属先を決定しなければならぬが、これは全面的に私の仕事となる。バーレーン、ロータス両大將軍の裁判が長引かない事をひたすらに祈るばかりだ。また、極端に低下した軍事力を補う手だてを考えなければならぬ。軍事国家でありながらも徴兵制を行っていないのがこの国の特徴なのだが、見直す必要も出てくるかもしれない。兵数の減少はつまり、国の兵力の弱体化と見られるから近隣諸国が圧力をかけてくるようになるだろう。優秀な外交官を選ばなければならぬ。どうあっても、数年は戦争が出来る状態

にはならないだろうし、国家予算も相当にダグラスの計画の為、隠密に使われていたらしく帳尻が合わない。何故、私が財務の心配まですなければならぬのかというと、財務大臣までいなくなつたからだ。これは、逸話になりそうなほど間抜けな話で、財務大臣は内乱が始まつた直後、半ば恐慌状態で王城から同僚や部下達と飛び出したところ、運悪く流れ弾に当たり、残りも右往左往としている内に闇魔法の餌食となつて全治1年以上。まるで、敗戦国のような有様だ。

さて、そんな中で喜ばしい話もあつた。

セバスチャン殿とジェイドが言うには、国境警備軍のシュタツヘル殿が大將軍の穴を埋めるに相応しい人物だそうだ。私も、目覚めた翌日に彼と面会したが非常に好人物だつた。年の頃は40代だが、その分経験が豊富な人物であり、これからのレミュエル王国の軍事体制に一役買つてくれると思われる。副官には海峽警備隊のドライグ殿を任命した。これもまた、50代なのだが腕も立つし荒々しい海の男のようでありながら知的で弁も立つという非常にお買い得……失礼……な人物だ。そして、もう1人の副官であるが、驚いた事にセフィーロ殿が推薦してきた。ライアルトという無国籍の剣士だつた。ダグラス一派としてウォーレン大將軍誘拐に手柄を立てた人物であるが、どうやらセフィーロ殿にかなり心酔しているようだからレミュエル王国に対して裏切りを働く事はしないだろう。また、セフィーロ殿と同等の地位について共に戦う機会に恵まれた事を非常に感謝しているようだつた。隠密系、情報系の長についてはシュタツヘル殿に任せてしまつていいからシュタツヘル軍についてはもう大丈夫。

ヨーゼフ様の戴冠式は、来月の頭に行われるが、それについては私は関わらないと明言しておいた。非常に失礼な物言いになるかもしれないが、祭事にまで関わっていたら政治の問題が一切片付かな

いのだ。ヨーゼフ様もそういった事には理解の深い方だし、すぐに了解してくださった。祭事が嫌いなヨーゼフ様だが、今回の戴冠式を盛大に行う事の意義はきちんと理解してくださっている。簡単にいえば、レミュエル王国の政治・経済・軍事的な余裕を……偽りであつても……見せつけるのだ。そのために、王国軍の衣装にも最大限の注意を払うし、最低限の軍勢のみを国境警備に残し、各軍を殆ど集結させる予定。予算については、バーフォンハイム家が快く寄付してくださったのと、貴族達から没収した分でかなりを埋められる。有名貴族がやたらと倒れたのは、赤字になりかけていた国家予算的には嬉しかったかもしれない。

*

「フレア総司令官の身分ですか」

現在、王国軍総司令官を務めているフレア総司令官の相棒であるクーファが私を訪ねてきた。突然の事で驚いたが、彼の話を聞くと成る程、困った事だと思う。フレア総司令官を今の役職に置いた事は是非についてだ。ヨーゼフ様が、彼女に絶対的な信頼を置けるからと申し上げた事がきっかけで決まった人事であつて、私が思うに戦闘能力以外は彼女は王国軍総司令官などには向かないと考えていた。だが、これに関してのヨーゼフ様はかなり頑固であつて、私の話であつても聞く耳を持つてはくれなかった。恐らく、父王が側近、ダグラスと最も信頼を置いていた大将軍ウラディス達に殺されたというのが……目に見えないようでも、あの方の中でかなり大きなショックとなつていらしい。それなら、ラファイン大將軍を任命すれば良いとも申し上げたのだが、彼が王国軍総司令官になつても全く改革の精神を国民に見せることは敵わないと仰つた。……これは確かに、一理ある。現在、我々の目指すところは内乱のきっかけともなつた頽廃した貴族政治の刷新であり、平民が軍のトップに

立つというのは確かにその精神を強く国民に示す事になる。……エレイズ殿が軍人を辞めなければ良かったのだ、などとは口が裂けても言えないが、そうであつたらと思う。彼女なら、確かにお若い人がの上に立つことに慣れていたし戦力としても人望としても申し分なかった。

だから私はクーファに同意見を示した。

「はい。私も、その件でヨーゼフ様に実は反対申し上げたのですよ」

「やっぱり、そうか」

クーファは腕を組んで唸っている。そして、口を開いた。

「かといって、そんな易々変更できる身分じゃねえ。大將軍くらいなら……悪いが、副官が後を継げば何とかなるが。クロウは補佐のプロだが、それ以上でも以下でもねえ」

成る程、やはり人間の寿命が馬鹿馬鹿しくなるほどの長きに渡って戦場に立ち、人を見てきたドラゴンというわけだ。よく判っている。

「承知しています。彼には……真に失礼ながら、私に似たところがありますから」

ああ、これは本当に失礼だな。クロウ殿はさぞかし嫌がるだろう。

「成る程。表に出ないで、裏で陰湿に色々画策する性格って事だなズバリと言われてしまった。そうか、クーファは私をそう見ていたというわけか。まあ、概ね当たっているのだが……。画策と呼ばれるような悪意に充ちた行動を取った覚えはない。」

「……言葉を飾らないにも程がありますね。いえ、その通りですが、それより、何故？」

そう、これを聞いておかねばならない。何故、今になってなのだろう。こここのところ、彼や情報局のイアリス達を中心に王城内でなにやら頻繁に集まりを開いているようだが。それと何か関係があるのか。

「ああ、ちよつと問題があつてな」

クーファの話に依ると、元々恋愛音痴であつたフレア総司令官が軍人最高位という地位を得てしまったが為に、更に相手の幅が狭まつてしまつていゝという話である。そして、それだけではなく平民出身で実際は三年も軍人として生きていない彼女には突然降つて湧いた地位の為に作れたはずの人間関係を失い、「閣下」などと呼ばれて距離を置かれるのが堪らなく辛いという事だつた。

「成る程。それも薄々、勘付いてはいましたが。

困りましたね。私のような、既にそういうものと縁を切つてゐる者ならいいのですが。フレア総司令官の年齢ではそうはいきまずまい恋……ですか。

それにしても王族のような悩みだ……ああ、思い出してしまつた」

私は思わず、盛大な溜息をついてしまつた。こここのところの厄介事の1つである。これに関しては、私はずっと心配していたのだが、今、王族がたつた1人となり問題が切迫しているのだ。

「ど、どうした？」

相談に来た相手に心配されてしまったが、私は思わず答えた。

「ヨージェフ様の縁談ですよ。縁談」

「ああ……」

「王がいて王妃がいて、そして世継ぎがいて……王国というものは安定していると初めていえるのです。他国から縁談が来ているのですが、相手なんて誰でも同じだと仰るくせに、いざとなると、嫌だと……はあ」

「苦勞人だな、お前も」

「繰り返しますが、ヨージェフ様よりお歳を召された王族が1人でもいれば……はあ」

クーファは本気で同情してくれているようだ。全く、どうして私はいつもいつも同情を受けるような生活を送らなければならぬのだろう……。

「クーファ、1日待って、また来てください。少し考えておきます」

「い、いいのか1日でよ。その、ゆっくり休まなくて？」

私の言葉に驚いている。だが、

「仕事が1つ減っても、1つ増えるだけですから」

というわけだ。この際、考えることが少し増えるくらい何という事はない。それに、新たに考え始める事柄という訳でもないからどうやって各所に混乱が起きにくいように、そしてヨーゼフ様の同意を得られるようにするかを考えるだけでいい。

「成る程……」

「文官の登用も、もつと力を入れねば……。雑用として、政治学校の生徒を実習に呼ぶか……。いや、その教育の時間が……」

「……参謀長、ヒマそうだから手伝わせたらどうだ？」

「ああ……その手がありましたか。ですが、参謀長も色々とお忙しい……」

「それホントか？」

「情報局から未処理の書類が回ってくると、この前ばやいていらっしやった」

エレイズ殿もなかなか忙しいようだ。ここどころ、情報部の仕事が滞っているようだから誰かに様子を見にいかせよう。ロザリア殿はサボタージユ癖があるうと、締め切りに遅れた事はない。それが今、あらゆるものが先送り、先送りになっているのを見ると。恐らく、上の方で何か問題が起きているのだろう。情報部の上の方といえば……シユウにも悪い事をした気がしてならない。ロザリア殿が大丈夫と言い切るからあの役職を承認したのだが、あの位置も本来ならガーディ殿が就いたほうが良かったのではないか。ちなみにガーディ殿は、フレア総司令官の情報管理サポートを行っているのだ

が。立場を逆にしたほうが良かった気もする。年も近ければ、内乱対策時を共に過ごした仲という事で少しはフレア総司令官の気も紛れやすくなっていたのではないか。……まあ、繰り返すか。

作者のヨナへの愛から生まれた番外編1（後書き）

2つに分けたのは、あんまり長いと見づらいかなと思っただけです。

作者のヨナへの愛から生まれた番外編2

「なるほど、まだマシになるな」

翌日の夕方、私の元をクーファが訪ねてきた。昨日の夜のうちに、大体の方策は決まっていたので彼に全て話す事が出来た。クーファも納得してくれたらしい。

「これから、各方面の責任者と話し合い、最終的には陛下の決定次第になるますが」

「とにかく、フレアに聞かせてやっていいか？ 多分、小躍りするぜ」

「……小躍り？」

例えなのか、本気なのかはよく判らないが、相当喜ぶだろうという事か。そんなに今の地位を重く感じていたとは……やはり、申し訳ない事をしていた。

「はい……あ、ヨナ宰相？」

「お久しぶりです、総司令官」

「やめてください……はあ」

本当に、嫌がっている。だが、文官の長でもある私がここで態度を崩せば下に示しがつかないため、申し訳ないがあるべき態度で臨ませていただく。

「私の固い頭で精一杯の改革を考えたのですが。お聞き願えますか？」

「え、は、はい！」

「反対もあるかもしれないのですが、簡単に言えば、王国軍の地位を低下させます」

「へえ」

フレア総司令官は興味津々である。普通、地位の低下と聞いたら眉をひそめるだろうが。

「低下とはいっても、総司令官の地位を大將軍と同じにするという事です」

つまり、「王国軍」という扱いではなく「フレア軍（王国軍）」とするわけだ。

「今まで通り、……フレア軍には王城を拠点に動いて頂きますが、トップのフレア総司令官はラファイン大將軍、ウォーレン大將軍、リア大將軍、シュタツヘル大將軍と同等の地位になります。フレア大將軍という敬称でいいかと。そもそも、各軍が独立して国内の秩

序を守り、時には共同で戦場へ向かうというのがレミュエル軍のあり方です。

王国軍というものの存在が、他の軍を抜きん出ている事こそがそもそも、おかしなことだった……」

「な、成る程です」

「法案を通すには半年、定着には1年以上かかるでしょうが。いえ……ヨーゼフ様の賛成が早くにいただければ、その半分で可能かもしれないません」

「それって、あたしがもう総司令官閣下！ とか呼ばれないって事ですよ？」

フレア総司令官の目が見たこともないほどの輝きを放っている。

「法案が通れば……」

「やたあつー！」

立ち上がって、クルクル回り始めたフレア総司令官。……小躍りしている。

「な、言ったる？」

「……そのように」

それから一週間後、私はヨーゼフ様との面会を希望した。

「王国軍総司令官位を廃して大將軍と同格に……か」

私の進言を聞くと、ヨーゼフ様は考え込んだ。説明する事とする。

「はい。理由の一つは、今の状況に若すぎる総司令官殿がついていけない状況となってしまった事。クーファの言葉ですので、間違いはないかと。私は総司令官殿の精神不調が起きないかと、懸念しております」

これについて私は自分の本心を少し大袈裟に脚色したのだが、より危機感は伝わったろう。

ヨーゼフ様が心配そうな色を見せた。もともと、フレア総司令官をととても好いておられるから今の役職にフレア総司令官を任命なさったのだ。彼女がそれで良い思いをしていないと聞くと、やはり戸惑われたようだ。そして、先を促された。

「一つ、という事は他にも？」

「はい。」

私のもう一つの懸念は、王国に二番手の地位を置く事です」

「……それは？」

「つまり」

これは私独自の思想であるから、自然と熱が入ってくる。

「どんな組織であつてもトップの補佐をする者は必要です。しかしその最上位を一人が独占する事は危険です。現在、ヨーゼフ様のすぐ下にはフレア総司令官がいるというわけですが、もし、一欠けらでもフレア総司令官に王権奪取の意思が芽生えたなら防ぐ術がなく、しかも現在、ヨーゼフ様には跡を継ぐ王太子があられません。必然的に、この国のナンバー2に全権が渡る事になるのです。権力にしる、機能にしる、集中すればするほど小さな部分を制圧されるだけで全体を制圧されてしまいます」

「でも、フレアがそんな事を考えるわけがない」

ヨーゼフ様のご指摘は、予定通りだ。

「それは私も、ヨーゼフ様のおっしゃる通りと拝察します。……が、それに気付いた野心ある者がフレア総司令官を陥れようとしたならどうでしょう。あの方は、現在の地位に魅力を感じていらつしやらない。働きかけを受ければ、その地位を譲ってしまう可能性すらあります。となれば、その新たなナンバー2がヨーゼフ様の御命を狙うのです。それから、レミュエル王国の歴史はこれにて完結ではございません。歴史を重ねれば先の内乱の首謀者達のような野心家もふたたび現れ、そういった者は狡猾に権力を手にします。ですから、最高権力者としてヨーゼフ様がおられる下に武官では大將軍たち、文官ではエレイズ参謀長と宰相であるわたくしが一切のズレなく肩を並べ、互いの立ち位置を監察、牽制しあう形こそが望ましいと、愚考した次第にあります」

ヨーゼフ様は些か驚いてらつしやるようだ。まあ、私自身もこのよ
うな熱弁を振るつたのは大層久し振りだと我ながら驚いているから。

「確かに、そうだ。一つでも危険があるなら、今その兆しか無い事

に甘んじて手を打たないわけにはいかない……。その意見を採用する方向で、考える。少し待ってってくれるかな」

「はい。ありがとうございますヨーゼフ様」

これが、ヨーゼフ様の魅力であり、力だ。進言を考えもせず一蹴する権力者も、逆に何も考えずに信頼のおける配下の者の提言ならばあっさりと受け入れる権力者も存在する。そして、多くの権力者というのは、実はその傾向が大であれ小であれどちらかに2分される。ところが、ヨーゼフ様は若さ故の柔軟性もあるのだろうか、丁度その中間地点……。つまり最も私が理想とする権力者に近い位置にあられる。他人の意見を一蹴する事もせず、かといって鵜呑みにもせず。時間を掛けてでもそれについて考え抜いて最高の結論を目指す。最高の結論などという物は此の世に存在しないのだから、最高の結論を求めているのではない。ただ、それを手にする努力をし、最大限それに近づける事が重要なのだ。ヨーゼフ様には、これが望める。実に、喜ばしき事だ。

*

「ほんと、ほんとですかっ!?! あたしが、大將軍に!?!」

この台詞だけ聞けば、念願の地位を手にした者のようだ。しかし、それとは幾分か違う。フレア総司令官あらため、フレア大將軍は地位の低下を心の底から喜んでいるのだ。

この法案を通すのは、意外にも割と楽であった。彼女を知る大將軍達は誰もが「それはそうだな」という意見を示し、特にリア大將軍は彼女の心情を聞いてから今日、改正が公布されるまで胃に穴があくほどの心痛を抱え、サボタージユでも何でもなく職務を週に

数回は休む始末であったそうだ。リア軍の為にも、この法案が通つて良かった。最後まで諸手を挙げての賛成に躊躇っていたのがやはりラファイン大將軍だが、ウォーレン大將軍に押し切られたようだ。シュタツヘル大將軍も胃に穴があく程ではなかったがやはり、大變に心配して、彼に心酔しており尚かつフレア大將軍をあまり好意的に思っていないかったシュタツヘル軍幹部のウインデイがずっと不機嫌であったとか。

そしてフレア大將軍だが

「これからも、順調にあたしの地位が下がったりしませんか？」

などと期待を込めて聞いてくるものだから……私は罪悪感で一杯になった。短時間で解決に至ったとはいえ、17歳の少女にこのような重責を負わせてしまったのだ。そして更に

「残念ですが、これ以上は……」

という事になる。

「そうですね。」

あ、クロウさんと立場が変わって、あたしが副官になるとか！

「……可能かもしれませんが、最低でも2、3年はお待ち下さい」

「うっ……はい」

がっかりしたようだが、以前よりもずっと顔が明るい。また、様々のところを作り替えなければならなくなるがこれが正しかったのだろう。フレア大將軍個人の話でもあり、フレア軍、いやレミュエル

王国の軍全体にとっての話でもある。私が、最高とはいえないが最良と思えるナンバー2の無い体制が出来上がったし、そのナンバー2が17歳の子供という事について囁かれていた不安も恐らく消える。

フレア総司令官がフレア大將軍になったからといって、進めてきた改革が後戻りするとは考えていない。依然、大將軍の半分以上を平民が占め、1人はバーフォンハイム家という大貴族であっても、1人は名もないような下級貴族の出身。それに、大貴族バーフォンハイム家は大貴族でありながら平民寄りの考えを持っているとして、下級貴族や平民からの人気が高いから問題にならない。宰相である私も平民で、参謀長エレイズ殿など、他国の生まれだ。

ここで、一つはつきりさせておきたいのは、何も私は貴族を嫌っているのではないという事だ。それに、馬鹿にしているのではない。ただ、レミュエル王国の歴史を辿るとどうしても今まで、問題のきっかけとなったのが貴族の軍人や文官であったという事だ。これからは意識の改革も行われ、貴族の子弟にはよりよい教育が行われ、よりよい人格形成が目指されるであろう事を信じている。私が目指すのは……まあ恐らく、私がこの位置にいる間には完成する事はないだろうが、貴族であっても平民であっても平等に機会が与えられ、互いを尊重し合う国とする事だ。

その為には、数日の徹夜くらい我慢しなければならないな。

作者のヨナへの愛から生まれた番外編2（後書き）

つまらぬものを失礼しました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9722x/>

作者のヨナへの愛から生まれた番外編

2011年10月28日17時19分発行